

権利と癒しの谷間

——フィリピンにおける女性の人権と民衆のスピリチュアル文化——

山下 明子

論文要旨

フィリピンは人口の大部分がクリスチャンというアジアでは例外的な国であり、土着の精霊信仰やシャーマニズム、とくに植民地以前からの女性宗教者の伝統と習合した民衆カトリシズムも盛んである。フィリピンはまた八〇年代半ばから女性運動を中心にしてジェンダー平等や人権教育においてアジアの先頭にあつてきた。このような国では個人の人権と家族や共同体意識、民衆の宗教文化はどのように結びついているのか。現地での面談調査に基づいて、フィリピンの宗教と植民地化によるジェンダーの変化と現状、民衆女性の教育と人権感覚、家族道徳と性暴力、民衆のスピリチュアル文化などの内容から、これらの関連性を宗教論女性学の視点で調べた。結論として、貧富の格差の増大と人権状況の悪化の中で、大多数の貧しい民衆女性は権利と霊的な癒しの谷間に追いやられており、両者をつなぐ方法が模索されなければならない。

序

広くアジアの国々、地域と比べても、フィリピンの文化と社会には希有な特徴がある。約四百年間におよんだ植民地支配、多民族、多言語の島嶼国家、グローバリゼーションの支配というだけなら、他国にも例はある。初めてフィリピンの調査でマニラに滞在した時に、この違いを痛感した。あえて言葉にするならば、「人が文化の国」という印象である。むろん文化論的にはおかしいのだが、この表現をすれば、フィリピンの

外で「フィリピン人たち」と知り合いになった時に感じる謎もとける。

「人が文化の国」では、名所旧跡や工芸品などを探すよりも、「人々に出会う」ことが一番になる。おそらくフィリピンほど、地位や階層、職種、場所を問わず、こちらにその気持ちさえあれば、初対面の人々と会うことが容易な国はないだろう。カースト制度や宗教の壁がある南アジアの国々、然るべき紹介者が必須の東北アジアの国々、タイやビルマなど東南アジアの仏教文化の国々でも、民族や階級の壁は非常にあつい。一方、フィリピン人の社会には民族や人種、言語、階層、宗教のちがいに優先する何かがあるのだろう。これはメイドや看護師、エンタテイナー、船乗りなど対人関係が大事な職種での外国への移住労働者が多い理由にもつながるだろう。

では、このようなフィリピンで一般に個人の共同体意識、あるいは隣人との関係意識はどのようなものなのか。ここでは家族や親族関係をこえて個人と個人を結んでいるのがフィリピンの宗教文化だと仮定しよう。宗教文化にはふつう民衆レベルのものとナショナルなレベルのものがある。キリスト教文化のスピリチュアリティの中心的性格は「隣人愛」だと考えられるが、これはフィリピンの民衆のカトリシズムでどのように働いているのか。そこにジェンダーはあるのか。また、国家としてのフィリピンはアジアでもっとも法的に整った人権教育の諸制度をもっており、多くのNGOが協同している。しかし現実にはフィリピンの人権侵害は深刻な状況にある。制度としての宗教、具体的にはキリスト教会は、民衆と国家の両方に大きな影響力をもちながら、この状況にどのように関係しているのか。

フィリピンは巨額の対外債務を抱えながら、出稼ぎ労働者の送金に依存した消費経済化が進んでいる。このような中で民衆のどのような宗教性と人権に根ざした「持続可能なコミュニティ」づくりが可能なのか。本稿は、これらの点について、筆者が二〇〇五年の三月と八、九月に行った現地調査の面談を中心にして、参考文献で後付けをしながら、宗教論女性学の視点でまとめたものである。面談者の名前についてはプライバシーに関わる場合のみ仮名を使っている。年齢は面談時のものである。

1 フィリピンにおけるジェンダーと宗教

フィリピンは国民の約九三%がキリスト教徒というアジアで唯一のキリスト教国で、八〇%以上がローマ・カトリック教会に所属する。しか

し、イスラーム教徒も南部諸島やマニラを中心に5%ほどいる。フィリピンのムスリムは少数派ではあるが、スペインが来る以前に伝道され、十五世紀半ばにはスルタン制も開始されていた。ムスリムには植民地化とキリスト教化を拒んできた長い抵抗の歴史がある。一方、カトリック教徒の大半は、植民地化以前からの土着の精霊信仰やシャーマニズムと習合した独特の信仰をもっている。教会はこれを非難、黙認、または聖者崇拜などにおいて利用している。広くフォーク・カトリシズムと呼ばれるものだが、内容的には地域やコミュニティ毎にバラエティがある。また近年、多くの原理主義的なカリスマ運動もある。これらは民衆の信仰実践の相当部分をしめており、フィリピンの人々の個人と共同体の意識を知るうえで重要である。

フィリピンにおけるジェンダーは、このような宗教の歴史と内容に深く関係している。ジェンダーは文化的、シンボルの性差として男女を二元的に分けることである。フィリピンのジェンダー研究は国立フィリピン大学の女性学研究センターやシスター・メアリー・マナンサンが創った聖スコラスティカ大学の女性学研究所などで成果が出されてきたが、私が面談した女性活動家たちも次のような共通の見解を示した。「植民地化以前の社会では、性別、行う仕事に応じて、人々は評価されていたが、女性が劣った人間だと見なされた証拠は見いだせない。しかし、植民地化がもたらしたジェンダー観念は、女性は生まれつき劣るといふ見解に基づいていた。」¹⁾

フィリピン中部のヴィサヤ諸島に伝承される創造神話は、竹が割れて女と男が同時に生まれ出たから男女対等とするのに対して、キリスト教では「男のあばら骨から女が創られた」から、女は男に従うものとされてきたことも、神学的に指摘される。しかし、マナンサンが植民地化による最大の問題として指摘するように、スペインは聖母マリア信仰によって処女性の価値をフィリピン社会と文化に植え付け、それまで経済的にも宗教的にも自立していた女性たちを、家長の保護の下に家庭と教会に閉じ込めたのである。²⁾

フィリピンでは、宗教に批判的なフェミニストや知識人であっても、かつてのフィリピンの共同体の女性祭司でシャーマンのな宗教的職能者であり、首長と対等の指導者だったとされるバイラン³⁾を誇りにしていることがわかる。後述するように、女性バイランの伝統は民衆のカトリシズムのなかに、今日も生きている。

ローマ・カトリック教会は女性の聖職を認めないから、公衆の面前でバイランの長髪を切るなどの侮辱や改宗をせまって拷問をした。しかし、屈服せずに山岳地へ逃げ込んだバイランたちは、支持者たちと共に何世紀間ものあいだスペイン人支配者への反乱を繰り返してきた。十

九世紀末のフィリピン革命の指導者たちの先駆けと考えられているのである。パナイ島の調査では、十九世紀後半に生きた著名なエステラ・バングバンワというババイランは、今日のババイランたちの間でも儀礼毎にその名が呼ばれているという。しかし、男性が指導するカトリック教会との宗教的な対峙から、民衆はやがて代替的に、肉体は男だが女性祭司の資質をもつ女装したアングのほうを選び、ついには反乱を率いる戦士でもある男性のババイランに変わってきた⁴⁾。

ジェンダー差別とたたかうキリスト教の研究者や女性運動体が、このように土着宗教とナシヨナリズムを女性の権利やプライドの回復と結びつけて考える、あるいは考えうる点は、フィリピンの独自性であろう⁵⁾。しかし、当時はまだ統一国家ではなかったから、植民地化以前の女性性的に男性と対等だったのは、それぞれの村（バランガイ、一族を中心とした共同体）においてということになる。ババイランは敵から共同体を守るための祭司でもあった。それゆえに植民地政府と教会が行ったことは、山岳地の住民を強制的に平地などに移すことで、古い共同体秩序を壊し、教会と役所を中心にした新しい町を作ることだった。町から遠い山地ほど「僻地」とした。このような町づくりに抵抗したのがババイランだった。スペインが中南米で原住民族に対してとつたのと同様の政策である。陽気な歌とダンス、聖書の物語のドラマなどで近隣の町からも見物がくる祭り（フィエスタ）や聖像を先頭にした賑やかな行列、教会でのミサが人々を引きつけるために導入された。まずターゲットにされたのが子どもと女たちである。

これらは現在もフィリピンのカトリック教会のスペイン的な特徴であると同時に、民衆女性の信仰と切り離せない。植民地化以前のバランガイ単位の政治と宗教は、男性指導の教会と国家の制度へと取り込まれてきた。抵抗する民衆がアングよりも男のババイランを求めざるを得なくなった時に、ジェンダーの変化は起きていた。教会の権威が及びにくい山岳地や山岳民族をのぞいて、フィリピン社会のキリスト教化は民衆の宗教と性に関する意識を日常レベルから変えたといえるだろう。

ローマ・カトリック教会は十二世紀以来、独身（童貞）の男性聖職制をとっている。これは神学的には霊的な男性一元論の制度化であり、女性の性をこの世的に限定し、男の補助的なものとするジェンダー秩序をつくってきた。「霊的な教会」の「男性」性と、これを支える「この世の教会共同体」の「女性」性とは、それゆえにセクシユアルな対なのではない。霊界の聖母マリアへの信仰は、このような男性一元論を補完するために、とりわけ女性信徒に与えられたものといえよう。カトリック教会がプロテスタント教会よりも「婚姻」の秘儀性を重視し、離婚や中絶を

禁じているのは、「霊的な教会」存立の根拠にかかわっているからである。しかし、ルター以来、聖職の「童貞」制を破棄したはずのプロテスタント教会も、女の性を肉体的として劣等視する霊肉二元論のジェンダー秩序を制度化してきたことにおいては同様である。政治や経済、学問などの世俗の領域では女性の活動が著しい現在のフィリピンでも、女性の牧師や教会役員はごく限られている。

2 フィリピンにおけるキリスト教会と人権教育

では、女性たちはキリスト教化によって「人権」を侵害されたのか。

キリスト教の宣教のために、まずババイランたちを「邪教」や「偶像崇拜」として排除しなければならなかったが、民衆を説得する効果的な手段としては、首長など共同体の上層部の家族を改宗させること、および子どもと女たちにカトリックの教理問答を暗唱させる教育が行われた。キリスト教の祭りを新しい町の中心の行事とするためにも子どもと女性が利用された。フィリピンを含めて近代以降のプロテスタントの世界宣教においては、寡婦や底辺層など社会的地位の低かった女性たちが鼓舞されて改宗し、ローカルな宣教の前線を担ったのだが、キリスト教教育と女性の関係においては基本的に同様である。問題はその教育の内容である。教会が国家の植民地行政と四百年間も結びついていたフィリピンの場合、教育の歴史もキリスト教のジェンダーが色濃い。

アメリカがスペインに代わってフィリピンを植民地支配した間（一八九八—一九四一）、アメリカの諸教会は宣教師として学校教員を送り込み、さまざまなプロテスタント宗派立の学校をつくった。とくに女子教育に力を入れたから、それに危機感を抱いたカトリック教会も新たな学校をつくり、女子にも高等教育や専門教育を受けることを許した。爾来、フィリピンの女子教育は貧しい階層にも開かれてきたが、アメリカに支配された時代のローマ・カトリック教会は政治問題には関与しない姿勢をとったから、女子教育も保守的だった。その姿勢はフィリピン独立後も、第二ヴァチカン公会議（一九六二—六五）⁶まで変わらなかったから、少数の大地主の家族と一部エリート階層による支配の構造は教会でも同様だった。

今日、大学などの高等教育機関においても女子学生および女性教員の数は男性をかなり上回っている⁷。当初の女子教育が、衰退する農業を支

えることができるなど「良い妻」を養成することを目的にしたとすれば、今日の家族が息子よりも娘の教育に力を入れるのは、息子は農業や漁業、林業など伝統的な家族の仕事を継ぐのに対して、娘は教育によって「良い仕事」の機会を得て、家族のために現金収入を得なければならぬからである。スペインの統治下で女性性は財産権を奪われ、結婚後はつねに夫との同居を義務づけられるなど、男性に従属する者とされたが、アメリカの女子教育は表向きは女子の福祉向上を謳ったとしても、スペインが敷いた家父長制を壊すためのものではなかったといえる。⁸⁾

フィリピンは民衆の人権意識が高い国とされ、アジアの会議などでもエリート層ではないフィリピン人の物怖じしない意見表明や明るい態度が特徴に目立っている。これは英語力だけのちがいではない。マルコス時代以来続いてきた人権運動が、都市市民だけではなく全国の草の根の農民や漁民、労働者、教会のワーカーにも及んでいるからだろう。一九八六年二月にマルコスの軍事独裁政権が無血のピープルパワーで倒れた時の驚きと感動は、それまでの血みどろの弾圧を知っているだけに、今も記憶に新しい。その後のアキノ政権は多くのNGOと協同してつくった新憲法において、人権教育を国家の義務であると明記した。フィリピンの人権教育に関しては、阿久澤麻理子氏のすぐれた調査報告がある。阿久澤氏も指摘するように、フィリピンの人権教育の核心は、民衆が自分を守るために人権を学び、人権侵害を解決しようとする、つまりエンパワーメントにあるといえる。¹⁰⁾ そのために、国際人権条約と国内法を学ぶことが重視されている点も、日本の場合と異なっている。

しかし、民衆にとつての人権の問題は、必ずしも当人の人権意識の有無や法律の存在とも関わりないことが多い。ここでは教会の人権教育にしばってみてみよう。フィリピンのNGOやPO（ピープルズ・オーガニゼーション）には教会を基盤にしたものが多いのだが、先にも述べたシスター・マナンサンやガブリエラ（注5）の女性活動家などは、現在の人権侵害はマルコス時代と比べても最悪の状況で、学校での人権教育や法律も有名無実だとして、教会の保守化とNGOの分裂にその責任があると述べている。私の短い滞在中にも、知るだけでも数人の人権活動家（フィリピン独立教会の牧師と学生3人）が白昼に殺害されたが、マスメディアは報じず、市民の関心も薄かった。政府を批判することの恐怖心が、教会に参列する一般の人々はもとよりNGOにもあるようだった。

カトリック教会は第二ヴァチカン公会議以降、神父もシスターも教会の壁から出て、最も貧しい人々の中へと入り、民衆から聖書の読み方を学び、共に生きるべしという「キリスト教基礎共同体（BCC）」づくりの運動を始めた。フィリピンはその実践で大きな成果をあげた国であり、なによりもシスターたちの意識と行動の変化が大きかった。¹¹⁾ 二月革命の時、向かってくる戦車の前に座り込んだのも制服のシスターたちだった。

しかし、シスター・マナンサンによれば、教会の家長制の構造自体は変わらなかったから、九〇年代以降のグローバル化と消費経済化のなかで、教会はふたたび正義よりも霊性を重視しはじめた。貧しい人々も外から何か利益を与えられるのではなく、また外に求めるのではなく、自身の内から変わらなければならないことがはっきりしたという。

では、教会は信徒がどのように内から変わること、内からエンパワーされることを教えているのだろうか。フィリピンでは教会の権威は国家と同等ほどに大きいから、たとえ公正と正義を保証する人権法と制度があっても、両者に齟齬があれば二重権威となり、国家にうまく利用されることになる。貧しいフィリピン女性の権利はその典型であろう。

マニラのカロオカン市の路地裏で妹と小さなサリサリ・ストアをしているローズマリーさんの事例をみてみよう。店といっても、仕入れのお金がなくて、売っている物がほとんどないから貧しさの程度が一目でわかる。ローズマリーは六六歳で六人きょうだいが、兄弟三人はすべて死に、一人の妹は今年亡くなった。一九七〇年にこの土地に移ってきて、九九年に糖尿病から失明し、足も悪いので歩けない。身内で一人だけ残った妹が面倒を見ているが、バランガイの人たちもパンバスを持ってきたりして助けている。近くのサグラダ・ファミリア教会員だが、教会に行けないので、信徒伝道者が彼女にミサのパンを与えるために毎日訪れる。幼少時からファティマ（聖母マリアの別名）を信仰し、聖像によってアレルギーが治るなどの奇跡を体験したので、結婚しなかった。フィエスタの時は踊った。ここに来てからもフィエスタの行列で聖像を先導する役をしていたが、現在は妹がしている。他の人を助けて生きることが信仰だと思いつ、失明後、神への信仰はより深まったという。しかし「貧困に病氣、どうしてこんなに人々が苦しまなければならないのか、とくに自分と家族の苦しみについては、神に尋ねるのが恐いし、尋ねたくない。ただ神が私たちといつも一緒にいて下さることに感謝しており、神を信じている」という。

私は彼女の固く腫れた足裏、膝裏、手のつぼをマッサージして、自分でもするようにその方法を教えながら、どうして教会は毎日ミサのパンを与えるよりも、せめて貧しい女性たちに甘いソフトドリンクについて注意したり、それよりも安い野菜をたくさん食べるように勧めないのかと疑問に思う。ローズマリーが例外ではなく、フィリピンのソフトドリンクは食事につきものといえるほど、異常な消費量だからである。また、住民が互いによく助け合っているバランガイだが、男たちは溝を小便の場所にしており、女たちはトイレで苦勞している。大都市マニラの水不足と環境汚染は深刻さを増しており、マリアアなどの危険性が田舎よりも高いほどで、これもスラム住まいの貧しい階層を直撃している。

一方、かつてマルコス時代にネグロス島でキリスト教基礎共同体を作って、貧しい労働者たちのなかで働いていたアイルランド人の神父ニール・オブライエンは、マルコス政権によって国外追放されたのだが、フィリピンでの二〇年間について記した著書のなかで、フィリピンの貧しい人たちから教えられた経験を数多く語っている。たとえば、六人の子持ちの「未亡人」パドットの話がある。働いて母親を助けていた十七歳の長男が、ジミーという友人に誘われ、家族の米代の足になるならと、砂糖工場のスクラップを盗みに行った。ガードマンに見つかって叩きのめされ、ピストルで撃ち殺された。ジミーは捕まり、他は逃げた。公正な裁判など誰も期待しなかったが、神父が頑張って、工場から約千ドルの補償金がせめても出るようになった。神父はその金をパドットが家族を養うのに役立つように使ってほしかった。補償金が届いたと聞いて、サイドカー付きのバイクを買うことを勧めた。しかし、パドットはすでにその金をジミーの保釈金として渡していた。茫然とする神父を見て、「ジミーが留置場に入っているなら、お金が何になるんです？」と、この母親は一言いったという。これでこの金は終わりである。オブライエン神父は書いている。「学校に行ったことも勉強したこともなく、聖書を読んだことさえもないこの女性は、人間が物よりもずっと大切なのだと私に語りかけていた。一方私は二〇年間も学校へ通い、そのうち七年間は正義について知り、実践することを熱心に追求してきたはずだった。」¹²

二つの事例からも、極貧のなかで女性たちは教会が教える以上に、助け合って生きており、問う勇氣はなくても何が正義かを知っている。そして教会が教えなくても、「靈性」とは他者を助ける生き方だと知っていて、お金よりも優先させているから、苦しんでも明るい。私はこれはフィリピンの民衆、とくに女性たちが長い苦難の歴史のなかで培ってきた希有なスピリチュアル文化だと推察する。これを人権教育によるエンパワメントと意識して噛み合わせる必要があるだろう。そこで次に、具体的に幾つかの女の人権問題とスピリチュアル文化の中身について考察したい。

3 家族と性暴力

「フィリピン人の幸福の基本は家族だ」、「フィリピンは家族を第一に考える文化だ」といわれ、「フィリピンの田舎をドライブ中に、もし人はねたら逃げるほうがいい。家族に捕まったらやっかいだ」という話まであるように、家族はフィリピンの社会と文化を考える上でキーワード

である。植民地支配される前の社会が一族を中心にした小さな共同体から成っていたことや、その後のキリスト教会による家父長制、そして独立後も今日に至るまで公の福祉をあてにできない政治のなかで、家族が団結して生きるしかないことなどの要素がからみあっていると見えよう。事実、貧しくても「幸せだよ」と明るく答える女性がフィリピンでは圧倒的に多いようである。しかし、家族や一族の「きずな」の為に、深い傷を負っている女性や子どもたちもいる。ここではキリスト教の性のモラルが家族構成員の女性に対して二重基準を課していることに関して、インセスト（近親姦）被害と学生売春の問題とを取り上げたい。

ケソン市にあるWomen's Crisis Center（一九八九年創設、以下WCC）は性暴力の被害にあつてトラウマを抱えている女性たちにフェミニスト・カウンセリングやマッサージ・セラピーなどを行い、別の場所に緊急避難用のシェルターを持っている。サリー・ウジャノ所長によれば、ここで対応しているレイプ被害の約半数がインセストの犠牲者である。しかし、母親に事実を知らせても、それ以降は連絡をとれなくなるケースが多い。夫と別れるよりも、娘を切り捨てるか敵視するためだという。インセストで警察に訴えるケースには母親や親族の女性に助けられるものもあるが、それは幼児期に判明した場合が多い。幼女に対しては性の二重基準はないので、周囲のだれかが本人の異常に気付くならば、家族も教会も行動をとりやすいといえる。しかし、幼児とはいえ本人が虐待者の行為に対して拒絶や「告げ口」をできにくくしているのが、家父長制の家族主義であろう。

幼児期のインセストの犠牲者の多くは、ずっと後に大人になってから、たいてい十三歳から二五歳の間に事実を認識して、明かすことになる。しかし、「そんなはずがない」とされてしまう。伝統的な「名誉の文化」や教会が説く「家族愛」が優先されて、それらを「守り、守られるべき女」は、もし犠牲者であることを主張するなら、「恥ずべき女」として共同体から追放されてしまう。何年にもわたる父親やおじなど家族からのレイプ経験が深いトラウマになっている女性にとつて、事実をようやく訴えた時のこのような母親や家族の拒否は、より傷を深めることになる。フィリピンでインセストが多い理由として、父親が娘を自分のものと考えて可愛がることをセックスも含めて正当化すると言われる。また、妻が海外への出稼ぎや仕事で留守の間、あるいは入院中や別居時に、長女が家事と同様に、性的にも父親の面倒をみるのが当然とされ、長女も妊娠などで外部の知るところとならない限り、自分から訴えられない¹³。このようなケースでは長女が学校を卒業するなど家を出た後、次の妹が犠牲になる。フィリピンにおけるドメスティック・バイオレンスの被害の現実を分析した研究でも、女兒へのインセストの場合、七一パーセ

ントが繰り返される暴行で、他のDVと比べてこの数値が最も高い。また、加害者として一番多いのが父親で二八%、次がおじで十五・四%となっている。インセストの犠牲者の約十八%が父親によって妊娠させられている¹⁴。

フィリピンでは技術や知識、資源をもたない貧しい階層の女性ほどジェンダーによる暴力に晒されていると言われる。同分析によっても、千のDV事例の内約六〇%が無職あるいは低収入の女性で、家庭内で夫または父親から暴力を受けている¹⁵。しかし、インセストのサバイバーの自助組織であるHILOM (Healing and Integration for Life and Options Management) の創設者のネラ・サンチャゴは、金持ちのカトリックの家族に犠牲者が多いと言う。自身のケースを含めて、家族が教会に熱心で寄付もよくする名家として知られていると、たとえ本人が教会で事実を訴えても、 balan gailang に訴えても、信じてもらえず、むしろ虐待者のほうが支持される。神父やシスターに「もし何かそんな風なことがあったとしても、何も悪いことではないから、愛だと考えて、赦しなさい」と言われて、またレイプされた気持ちになったという。一家の名誉を守るために娘を切り捨てることは、上層階層ほど強いといえる。しかし、最初に相談を受けながら、適切な対処ができない教会のシスターや神父、牧師の責任はより大きい。

犠牲者たちのトラウマの大きさは、怒りや悲しみなどのネガティブな表現ができるようになるためにと、HILOMが行っているアサーティブネス・トレーニングからもわかる。少なくとも会員はエンパワーされて変わったが、情緒が安定しない症状はだれもが抱えているという。HILOMはメディアなどで積極的に訴えているが、それでも社会からの孤立感が強い。

会員の一人であるクリサン（四一歳）は、三歳から七歳まで母方の大叔父にレイプされ、「血が出た」が意味がわからなかった。七歳の時、学校でゲイの教師にマスターベーションを教えられて、自分が性虐待されているとわかった。従妹も同じ目にあっていた。十一歳の時にその大叔父が亡くなって、それまでの内向的なのに他の女の子を暴力から守ろうとする時にだけ攻撃的になる性格が外交的へと変わった。高校時代を通してカトリックの教会活動と勉強に熱中し、その後も二四時間ワーカホリックのように仕事に拘束される道を選んできた。国立フィリピン大学の一年時から十六年間はフィリピン共産党員で、一九九二年のラモス政権時代に地上に出るまで地下活動をしていたという。恐怖心はまるでなかった。地上に出るからは党内に法的な女性運動を組織する仕事をしてきたが、そこでDV被害を訴える女性が多くいたにもかかわらず、「社会主義が実現すれば解決する問題だ」という党の公式見解に疑問を持ったので、党を出たという。その後女性運動に関わり始めてから、インセ

ストのトラウマが戻ってきた。三歳から七歳の時の記憶がまるでない事実や、女兒のレイプ事件をきくたびに恐怖でからだが無感覚になることなどである。しかし、HILOMのトレーニングでかなりよくなったという

ネラもクリサンも上記のような理由から教会に批判的でミサにも行っていない。クリサンはネラの娘の堅信式の時、代母 (god-mother) になったので、久しぶりに教会の礼拝に出たという。しかし二人ともスピリチュアルな儀礼には熱心で、とくにろうそくを灯した祈りや瞑想を日常的に行っている。HILOMも女性運動体ガブリエラのメンバー組織である。バイランを誇りにし、歌や踊りを行事にも取り入れている。

上記したWCCのシェルターでも、日曜日に教会のミサに行きたいと願う女性が多く、しかし外に出ることは危険なので、宗教を問わず祈ったり瞑想できる静かな部屋をシェルターの中に設けている。単に習慣だといってすますことのできないスピリチュアルな儀礼の重視においてもフィリピン女性の特徴があるといえる。「わたしは宗教的ではないがスピリチュアルです」と答える活動家やエリート女性が多い。

つぎにインセストと同様に家族主義の問題というべきフィリピンの学生売春についてみてみよう。教会が説く家族のモラルと性のタブーは彼女たちにどのように影響しているのか。

フィリピンは女子の学歴が、主として家族のための就職口の必要により男子のそれを上回っていることは先に述べた。しかし、家族から支援を得られず、せっかく都市に出てきても経済的な理由で学校を続けられずにドロップアウトする率も非常に高い。中退と卒業では学歴の大きな違いとなる国で、学生売春が高校や大学、専門学校などをなんと卒業するための経済行為であることは明らかである。¹⁶一方、カトリック教会は婚姻外の性行為を禁じ、離婚を禁じ、中絶を禁じている。しかし、現実にはフィリピン社会には婚姻外の性関係は広く存在し、教会で結婚式をあげられない同棲や駆け落ち婚のカップルとその子ども、シングルマザーの子どもも多い。買春も日常的に行われている。(だからといって日本人など外国人男性の買春ツアーが肯定できるのではない。)

中絶は闇行為で犯罪とされているから、若者の性意識が変化して、恋人間のセックスがふつうになってきている現在でも、妊娠すれば結婚して出産するか、密かに生んで両親の子どもとして届けることが多い。カトリック教徒の母親も私の面談した範囲ではほぼ全員が「たとえ娘が婚姻外で妊娠しても、中絶は殺人だからいけない」と答えている。単に表向きの発言ではないことは表情をみればわかる上に、実際、娘の生んだ子どもを自分の子として育てている親は多い。共同体も知っていて噂はするが、やむを得ないこととして黙認する。

しかし、やはり未婚の出産はリスクを伴う。妊娠がわかれば退学させられる私学も多い。妊婦の死亡率も高い。伝統的な墮胎薬も使われているが、プロテスタントのラムス大統領の政権下で認められていたコンドームの使用が、「熱心なカトリック教徒」のアロヨ政権下で販売が制限されて、手軽に入手できないために、闇で危険な中絶をせざるをえない若者が増えているといわれる。レイプによる妊娠もある。学費や生活費を稼ぐための学生売春はこのような社会背景のなかで行われているのである。

フィリピン女子大学はカトリック系の私学で、国立フィリピン大学に次ぐといわれる女子の名門校である。カフェテリアで学生たちに性と学生売春について尋ねた。彼女たちによれば、友人の間ではボーイフレンドとのセックスはごく普通で、妊娠すると中絶費用を助け合って出し、親に知られないようにしている。学校で性教育はまったくなく、家庭では厳しいので、友達から情報をえる。しかし、ほとんどが「でも自分はやはり婚前交渉は良くないことだと思う、罪だ」、「もし求められたら彼との関係をあきらめる」などと答えた。七時が門限という学生やボーイフレンドを持つのを親が許さないという学生もいるが、両親が離婚や別居中の学生がかなり多いのに気付く。また、学生売春については誰もが知っており、妊娠してしまって子どもがいる女子学生のことやボーイフレンドから金をとってセックスしている学生の噂、あるいは男子学生の手引きで学生相手に売春している女子学生や「偽学生」のことで、具体的に話しがでた。「貧しい家庭だから」と同情を示す学生もいるが、たいていは「考えられない」「学校の名前を汚す」と批判的である。

同大学の「宗教学」の若い男性教師（修道士）に売春している学生たちをどのように指導しているのかを尋ねると、「個別面談で事情を聞くが、すぐにやめなさいとは言えない。学生も卒業したらやめまうと言うので、病気にだけかからないようにと注意する」という。経済的事情を配慮してのことだろうが、むしろ彼のクラスの学生で毎週日曜日に教会のミサに行くのは五〜一〇％しかないだろうと、学生たちの信仰心が強くないことを心配した。最近ではショッピングモール内の礼拝堂が若者たちに好まれるようで、上記の学生たちも同意見だった。しかし、大きなモールは公園や道路と同様に売買春の取引の場所でもある。

一方、教会に行ったり神に祈るといふ信仰行為に関して、インセストの犠牲者たちと逆のことが、むしろ一般化はできないだろうが、学生売春する少女たちに見られる。売春女性たちを支える目的でつくられた教会関係のNGOや女性組織が幾つかあり、たとえばフィリピンキリスト教団（UCGP）のシナグ（SINAG Kababaihan）では、売春をやめるように論ずるのではなく、神に祈ることを教えながら支援している。フィリ

ピンの教会には、都市の貧しい女性たちが売春したり、外国人の「愛人」になることをセックスワークとして是認してきた植民地時代以来の四百年以上の歴史があるといえる。¹⁸これが性の二重基準である。しかし信仰は個人それぞれのものであるから、学生売春の場合、「勉強を続けたい」「卒業するまで」というフィリピンではとくに強い理由もあり、神の助けにより苦しみを乗り越えようという意思が支援を受けて強まるのだから。

ジャネット（十四歳¹⁹）は教育を受けたかったが、母親がお金がないからと嫌がったので、どんな仕事をしてでも学校に行こうとマニラに出て来た。叔母の家に住んでおり、高校一年までは叔母が学費を出してくれたが、二年になった時に断られたので、近所の友達に誘われて売春を始めた。現在、四ヶ月目だが、毎日ほとんど眠る時間がない。六時に起きて家事をし、学校の授業は十時から午後七時までである。その後、街に立つ。宿題はきちんとやることに決めているので、朝五時まで起きていることがある。客にぶたれても笑っていないといけなし、自分がしていることが本当に嫌で、やめたいと思う。賃金が低くても、侮辱されない仕事をしたい。しかし、叔母にお金を渡せば、黙っていてくれるし、授業料や将来の教育のためにも貯金できる。幸い、なんでも話せる親友がいて、ジャネットのことを「ナイフの刃にしがみついているようだ」という。ジャネットが辛くて泣き叫ぶからだろう。

ジャネットの両親は別れており、母親が二人の弟妹とパンガシナンで暮らしている。いつか夢を実現したら、また家族と一緒になろうと自分に誓っている。「たとえ売春してでも教育を受けたのだと言って、わたしのことを家族に誇りにしてもらいたい」という。彼女は苦しみのなかで神への信仰を強めており、現在の状況を神の試練だと受け止めて、神と支援団体のシナグに感謝している。

ジャネットと同様に、家族から捨てられて、あるいは自ら関係を断って、肉体を売りながらも学業を続けている多くの少女たちを支援することは絶対に必要である。しかし、無事に大学や専門学校を卒業して、生活できるほどの賃金の仕事につき、さらに親やきょうだいとの関係を回復して「幸せだよ」と楽しめている女性はどれだけののだろうか。彼女たちのエンパワーメントについては、インセストの犠牲者に対するのと同様に、人権の視点から性暴力文化を直視することが必要だと考える。性暴力に晒された女性たちはフィリピンで最も大切とされる家族と共同体から切り離されるから、そこに再統合されるためには、両者が変わらなければならない。

4 民衆女性のスピリチュアル文化

都市のエリート層の間に既成の宗教の枠をこえた欧米型のスピリチュアルなつながりが生まれているのはフィリピンにかぎらない。その中には欧米経由の東洋宗教的スピリチュアリズムのグループが幾つもある。先の HILOM のネラのように仏教系ニューエイジの週毎の集まりに参加している菜食主義のクリスチャンも多い。一方、植民地化以前からの精霊信仰と共同体のシャーマンであるバイランの伝統が、カトリック信仰と習合しながらも全土で生きているフィリピンには、民衆のスピリチュアリティに強い特徴がある。これらはかつては迷信視されたが、今日ではエコロジーやフェミニスト神学においても再考されている。

キリスト教の霊肉二元論は先に述べたように性差別的秩序を構築した。一方、この世とあの世を二元論的に分けず、強いて言えば心身一元論的である民俗信仰には社会的性役割はあっても文化論的なジェンダーはないといえる。この両者が政治的権威としてのキリスト教優位に結合した時、共同体の宗教の性格が変わった。たとえキリスト教が形式的にしか受容されていない山岳地の村々でも、女性は霊的職能者として残っている。もはや村の重要な儀礼を執行する祭司ではなくなった。⁽²⁰⁾しかし、性質をかえてもバイランの伝統は今日まで続いているので、ここでは、三種類の霊的職能者と彼女たちが支えている文化について、比較考察しよう。

まず、共同体での地位を失って都市に移住し、個人の病氣治療や吉凶の占いをする「信仰治療師」(faith healer, spiritual healer)と呼ばれる宗教的職能者たちがいる。女性が多く、ほとんどがカトリック教徒だが、ムスリムもいる。自分の家やオフィス、街角で治療や占いをしている他、たとえばマニラのキアポ教会は早朝から晩まで熱心に礼拝する人たちで込み合っているが、その敷地内の一角にずらりと信仰治療師(以下ヒーラーとよぶ)たちが並んでいる。

その一人のエスベランサ(五六歳)に話を聞いた。カードと姓名判断で病氣などを占っている。ヴィサヤ出身で母も祖母もヒーラーだった。十二歳の時に夢で神託をうけた。ドイツにいる友人に招かれて、ドイツで二年間カード占いの勉強をした。子どもは四人で、霊的な力を持っているが、メリノール(有名私学校)で学ばせている。「自分のようにはさせたくない」、「カトリックでは占いは罪だから」、と語った。私の吉凶占い(病氣治療に関しては別料金)と面談時間(三〇分)に対して二百ペソを要求したので、同行して通訳してくれた HILOM のネラが高いと

怒って、インチキに違いない、メリノールも嘘だろうと後で言ったが、私は経験上、そうは思わなかった。占ってもらうのが目的ではなかったが、インチキ治療師に客はつかない。しかし子どものことを話したがない態度には不幸が感じられた。韓国で面談した巫儀（ふぎ）にたけたムーダンが「子どものために前夫と別れた。母親がムーダンでは教育に良くないので⁽²¹⁾」と語った時の表情に似ていた。フィリピンではヒーラーが韓国の巫女（ふじょ）のように賤民視されることはないが、「子どもは良い職業につかせたい」と願う気持ちに、矛盾はあっても嘘はないだろう。

同様に田舎の共同体を離れて、欧米経由の日本のレイキ (Reiki; 霊気)⁽²²⁾などをドイツで学んでバイランの伝統と結合させて成功した女性がジョスリン・ビラサーノ (四八歳) である。ほっそりと質素で、前かがみに歩く目立たない女性だが、マカティ地区の高層ビルの一室に治療所兼学校をもち、世界の有名人の病氣治療で外国にもよく出かけている。ジョスリンはビコル出身で、父母とその両方の祖父から透視能力を受け継いでいるという。祖父がフィリピン独立教会（23）の司祭だったので、三歳の時から祖父と二人で毎朝六時からラテン語の祈祷をした。父はモルモン教会の司教だったが、二〇年前にココナッツの木から落ちて死んでいたのを母が見つけて、生き返らせたという。母がキリストを見た最初で、この時から母もヒーリング・パワーを持つようになった。彼女自身は二〇歳位までは聖母マリアに抱かれる経験を何度もしたという。大学で農業学を学んで、十年間ビコルの大学で教えていたが、神病 (神憑き) で苦しめられたので、十年前から専門の霊的治療師になった。

ジョスリンは透視力を持つ霊能者だが、しばしばドイツなどに勉強に行ったり、博士課程でも学んで知識を深め、治療法を深めようとしている。娘と三人の孫がいるが、何よりも力を入れているのはレイキやシバシ (氣功太極拳の一種) を組み合わせたヒーリング・パワーの養成クラスで、すでに千人をこえる修了者がいるという。彼女によれば、フィリピンの地下には掘り出されていないミネラルが豊富にあり、そのおかげでエネルギーが強い。これが古代から続くフィリピンの霊的な力の理由であり、ヒーリング技術に繋がっている。これを守っていくためには、人々とこの力を共有しなければならぬのだという。すべての人がその可能性と才能を持っているという。しかし、そのためにフィリピンがしなければならぬこととして、子どもをつくるのをやめる (人口をこれ以上増やさない)、中絶を認める、カトリックの指導者を教育する、外国へ出稼ぎに出るのをやめる、シンブルな生活をする、木を植えること、という六点をあげた。あくまでもスピリチュアルな観点からの予言なのだが、フィリピンの現状に対する批判的な意見と重なる。

そこで具体的なヒーリングとして、ドメスティック・バイオレンスなどの犠牲者をどのように癒すのかを尋ねると、三つのステップを取ると

いう。まず靈的に傷を癒してから、自分自身を癒す方法を教え、次に、他の人を助けなさいと言うという。売春している女性や男性が相談に来た時には、即刻やめるように忠告する。いろいろの異なるエネルギーがミックスするのは靈的な汚染であり、よくないのだという。これはNG Oや女性組織の本人の経済的事情を考慮する支援方法とは違っているが、家族道徳を重視する教会とも異なる。フィリピンに同性愛や性転換者が多いことについても問題なく、むしろ異性愛のほうに問題が多いという。

全体的にみて、ホーリスティックな治療とカウンセリングをしているといえるだろう。宗教についても自分のルーツがカトリックならカトリック、仏教なら仏教を大事にするようにと教えるので、客は病気などの治療を受けながら、安心してヒーラー養成のコースでも学んでいる。韓国人や日本人を含めて外国人やムスリムも参加している。ジョスリンはフィリピンのバイランの伝統を誇りにしている現代のエリート・ヒーラーだといえる。しかし、彼女の学校の修了生たちがどのようなつながりのネットワークを作っていくのか、ゆるいスピリチュアルなつながりであるのか、新しい隣人愛の共同体を志向しているのか、あるいは愛国的な政治的保守の基盤となるのか、よく見えない。靈能的には民衆宗教を基盤にしているので社会的地位は低いが、先に述べたキアポ教会の構内や街角、家で治療している個人ヒーラーと客との関係性とは異なっている。後者は治療内容はさまざまであっても民衆カトリシズムという共同体のあいまいな境界線の内側にあるが、ジョスリン・ピラサーノの治療センターは境界線を越えているように見える。それゆえに、教会によって精神的に傷ついたり、家族から追い出された個人を受け入れることができるが、ここで全人的に癒されたとして、本人が日常生活にどのように復帰できるのか、より具体的には食べていけるのかが問われる。フィリピンのように仕事がなく構造的に貧しい社会では、助け合いがなければ生きていけないからである。

そこで次に、都会ではなく山岳地のバナハウでバイランの伝統を継いで、女性司祭を中心にした生活共同体をつくっている教会Suprema de la Iglesia del Ciudad Mystica de Dios inc.を見てみよう。

バナハウは「聖なる母」あるいは「国の母」(イナグ・バヤン)の住まう山として、スペインに支配される以前からの巡礼地で、バイランたちの山でもあった。フィリピン独立運動の英雄ホセ・リサルが拠点にした山としても知られ、フィリピンの宗教的ナシヨナリズムの原点でもある。夏のとくに受難節には巡礼者や登山客などで非常に賑わう。ここには三〇ほどの大きささまざまな宗教共同体が点在し、巡礼者に無料で宿も提供している。特徴的なことに、そのほとんどが女性司祭を中心にした自給的な共同体である。ローマ・カトリック教会は今日も女性聖職を

認めていないので、フォーク・カトリシズムがそのジェンダー秩序を受け入れていないかぎりでは、これらの教会はカトリックとはいえない。しかしプロテスタントとも異なっているフィリピン独自の民衆宗教である。

この山にはスペイン人が来る前から神がいたが、その神はフィリピンの神であり、キリスト教の神でもある。だから独立戦争の時、スペイン人が独立軍を追い出そうとしても「神の光」（サンタ・ルシア、聖ルシア）が現れて守ったのだと信じられている。バナハウ山に滞在中に、「なぜ女性聖職制なのか」と聞いたカトリック神父に対して、一人の女性司祭が「ねえ神父様、フィリピン国旗に似た服をまとった女性が表紙になっている本を見ましたよ。それから聖書を読んでいたら、足下に月を、頭上に十二の星の王冠をつけて、空に立っている女性のことを書いた節がありました（ヨハネ黙示録十二・一）」と答えたという。フィリピンの民衆（タオ）の開発の概念を重視しているテレシタ・オブサンもバナハウの村でフィールド研究を始めた学者だが、上記の神父への女性司祭の応答の仕方をその例としてあげている。²⁴

「神の神秘の都教会」²⁵もバナハウを世界の聖地、フィリピンのなかのエルサレム（新しいエルサレム）と考えている。創立者のマリア・ベルナルダ・バリターン（1876-）は聖母マリアと同様に聖霊によって受胎したとされ、数々の神秘的な行跡が伝えられているが、彼女の教えが現在も守られている。ベルナルダは幼児期から神秘体験をし、脱魂して天国に連れて行かれて神の前でメッセージを受け取ったという。七歳の時に「私の子よ。お前は祝福されている。地球でのミッションを成就し、私のミッションを完成しなさい」という命を受けた。七歳にしては知識が豊富なので、真偽を確かめにきた七人の男がベルナルダの前で意識を失ったが、二四時間後に回復したら、「私は四〇年間でもそうさせておける」と言われたという。この男たちが彼女の力を信じたので、宣教が広まった。ベルナルダは近い将来に血の革命が起きるとも預言したという。また自身のことを意味するのか不明だが、終末には「キリストによって一人の女が送られ、彼がしたことを続けるだろう」と述べている。男女は平等であり、女性のほうが霊的な能力があるのは、女の時代が来るからだとも預言したという。ベルナルダは平和を乱す、司祭権を侵しているという理由で何度も投獄された。

現在のスプレーマ（最高の霊的指導者）はベルナルダから四代目のイサベル・スアレス（六四歳）で、会員数は約五万人。司祭は三〇人で全員女性である。ミンドロとカビテに支部があり、支部のスプレーマがいる。バタンガスに中央事務所がある。いろいろな決定事項は三人のスプレーマの協議によって決めるという。イサベル自身が私の質問に答えながら創立者のことから教会の歴史と教え、一九六三年に二三歳でスプレ

ーマに選ばれた経緯や現在の状況などを語り、さらには建物の内部から信仰治療などを案内してくれた。ジョスリンよりもさらにひっそりとした修行僧のような女性だが、大きな生活共同体の責任を背負っている苦勞も感じられる。彼女の祝福を求めて、子どもや大人たちが「マザー」と寄ってきては、挨拶する。紺色のエプロンの大きなポケットに自分用の鮎が入っていて、時折、子どもたちに与えている。共同体の人たちのスプレーマに対する尊敬と信頼、親しみがにじみ出ている光景である。

バナハウの中央本部は司祭たちも含めて農民の共同体である。本部の大きな木の建物はイサベル自身がデザイン設計したそうで、ガルーダに似た鳥が巨大な翼を広げたかたちをしている。全部で三エーカーの土地に米と野菜を植えて自給し、加工品の製造と販売もしている。家族はそれぞれの小屋に暮らし、農作業や大工をし、食事はキッチン兼用の大食堂で時間が来るとそれぞれにとっている。農産物の加工も女性たちがキッチンで行っていた。女性は長い髪でロングスカート姿だが、これはかつてバイランがスペイン人によって広場の公衆の前で強制的に髪を切られた歴史と女性であることの誇りを大事にしているからだそうである。スプレーマは、都市の物質主義の風潮を批判して、質素が大事だと強調した。ここでは宿泊者からも現金による献金はけつして受け取らない。必要に応じて、たとえば山の道路や建物を修復するなどの費用として、信者や病気を治癒してもらった人たちは払うという。

朝夕の礼拝時には、共同体の人々が続々と礼拝堂に集まってくる。広い礼拝堂の真ん中と左側に、布やドンゴロスなどのそれぞれの敷物をゆったりと広げて、女性たちが堂々と座を占める。一方、右側には体をくっつけて男性たちがびっしりと座るが、屈折した様子はまったくない。子どもたちが母親たちの座の間を走り回っている。正面の祭壇では、先ほどまでの農民服を脱いで、頭に王冠をかぶりレースのベールをつけた当番の女性司祭とやはり女性の侍者がおごそかに儀礼を執行する。その前に白い服姿の女性たちが座り、賛美歌や祈祷文などをリードする。祈りの中心は世界中の平和と癒しである。聖霊を象徴するエンジェルのかたちの祭壇をのぞいて、礼拝堂に偶像は一切ない。スプレーマ・イサベルはいつもと同じ紺のエプロン姿で、ひっそりと隅に座って祈っている。司祭も白い服の女性たちも特別ではなく、ふだんは同じ農民であり、誰でもなれるといい、司祭にもとくに給料はない。共同生活しているので、必要に応じて経費が出るだけである。

賛美歌と祈祷文はタガログ語とラテン語、聖書はスペイン語の独自のものが使われているようだったが、参列者はそらんじており、普通の教会のように礼拝次第を書いた紙や賛美歌の類は一切手にしていなかった。オルガンもない。私はなによりも会堂に満ちている素朴ながら非常

にスピリチュアルな雰囲気を感じた。ビデオ撮りも写真も許されなかったから、入り口に座っていただけだが、やはり「宗教的共同体は女性祭司者のほうがいいな」と強く感じると共に、アジアのキリスト教の女性会議での礼拝がシスターフードに満ちていても、この雰囲気は生まれないことを知らされた。宗教は儀礼も含めて生活の現場のもでなければならぬと感じさせられたのである。

カトリックの典札と民衆の土俗信仰とが混淆しているキアポ教会の独特の熱烈な祈りの雰囲気とも、マカティの高層ビルの中のヒーリング・センターとも異なり、土の匂いのする自然で文化的な礼拝だった。また、ここには信仰治療師が三人いる。役所が資金を出してつくったという納屋のような祖末な土間の建物が、公立のヘルスセンターの向かいにあり、だれでも無料で診療が受けられる。入院用の部屋は男女別になっている。入院患者には家族が付き添って食事などの世話をしている。マニラから有名人が来ることもあるという。噂の診療所で、歩けなかった人が歩いて帰っていくことも多いという。聖書の「使徒言行録」(三・一―一〇)にあるペトロがイエス・キリストの名によって足の不自由な男を癒した話と同様である。しかし、ふだんの患者の大半は病院に行くお金のない貧しい人たちのようである。

ヒーラーの一人アソン(四八歳)はここに住みながら三〇年間この仕事をしている。むろん無給の奉仕である。アソンにこの方法を教えたのがスプレーマ・イサベルの父である。皿に入れたオリブ油とレモングラスと患者の名前によって病を占い、治療方法を教え、病によっては直接治療する。病院に行くように指示する時もある。ヒーラー本人は媒介するだけで、病の箇所を教えたり癒すのは神だという。ベッドを除けば唯一の家具である受付兼用の机の上に、自分で隣の葉草畑から摘んできたばかりの傷のないレモングラスをオリブ油を注いだ皿のへりに丁寧に並べながら、真剣に祈り、ろうそくを持った患者と向き合っているアソンは、神の道具としてのヒーラーに徹しているが、その目は年齢をまるで感じさせないほど澄んでいて、しかも鋭かった。

レモングラスにできたオリブ油のしみの具合で病の箇所と内容を判断する。私のタカログ語の通訳が娘の名前を告げて見てもらったところ、葉の上部に黒い丸いしみがくつきりと現れた。「喉が悪い。これは気をつけなければならない。葉草を飲むとよい」と言われた。実はぜんそくがあつて、できれば転地したいと考えていたそうである。この教団には質素と謙虚さ以外には戒律はなく、司祭も結婚でき、いつでも司祭をやめることもできる。男性も司祭になりたければなれる。ヒーラーも同様である。しかし、神の前に嘘偽りが通用しないことを信仰治療師は体験によって誰よりも知っているから、どれほど患者が多くて疲れても、毎日が真剣である。それゆえにヒーラーがやる時とは、もはや神の媒介が

できない時であろう。

聖地バナハウ山を「新しいエルサレム」（ヨハネ黙示録）と信じて守りながら、そこに伝統的に生き続けようとする女性スプレーマや司祭、ヒーラー、そして農民女性とその家族たちの質素な宗教コミュニティと、登山客の多さとゴミなどによって環境が悪化し続けるバナハウ山の現実、フィリピンの現状を対照的に映している。シスター・マナンサンも指摘するように、スプレーマ・イサベルはフェミニストではないし、「神の神秘の都」教団はフェミニスト組織とも呼べないが、「母なる神」を含めた神のイメージは包括的であり、女性役割が重視されている。教団運営だけではなく生活の儀礼的側面においても、女性のリーダーシップが優先されていることなどから、この教会共同体とスプレーマは、苦闘するフィリピンの女性運動、とくに女性と宗教の分野において非常に重要な役割をもっているといえるだろう。スプレーマはカトリックのシスターに向かって「どうしてあなたは自分の教会に男の指導者だけをゆるしているのですか？」と率直に聞いたという。²⁶⁾

5 権利と癒しの谷間——結びに代えて

私はアジアの国々で女性と宗教について長くフィールド調査をしてきたが、ほとんどの家父長的宗教が女性差別の根源になっている事実と、教義の枠をこえた女性たちのスピリチュアルな力の強さを知った。フィリピンは人口の大部分がクリスチャンというアジアでは例外的な国であり、フォーク・カトリシズムも強い。そこで私の調査方法にもそれゆえの特質があった。冒頭で述べたように、私はフィリピンで「人が文化の国」というインパクトを受け、他の国とは異なる種類の民衆のスピリチュアル文化をつよく感じた。同時に、フィリピンの人権運動、とくに女性の人権運動が八〇年代半ばからアジアの先頭に立ってきたことに長年感銘を受けていた。両者は当然関係あるだろうと考え、その理由と背景、また今後の方向性を調べたいと考えたのである。

日本で現在ブームになっている「スピリチュアル」はテレビ番組の影響であまりにも軽く、自分志向の域を出ないが、フィリピンの知識人たちが口にする「自分は宗教的ではないがスピリチュアルだ」は、見てきたように体制的宗教への批判のことばであり、逆にフィリピンの民衆宗教への志向性を持ち、人権意識ともつながっている。現在も実質的にアメリカの支配下にある状況で、植民地支配される以前の共同体と、支配

に抵抗したバイランの伝統が独立運動とも重なって、両者をつないでいるようである。西洋の支配に抗するフィリピン人のナシヨナリズム意識といえると同時に、一方で民衆のもつ共同体的なスピリチュアル文化をあいまいにする危険性もある。生活にゆとりのある都市エリートのスプリチュアル文化は、ことば上の民衆志向とは別に、個人主義化しグローバル化しているからである。「神の神秘の都教会」のスペレーマが暗に皮肉ったように、既成の宗教教団を現場で変革する困難さ、わずらわしさから逃げる余裕があるからだろう。

フィリピンでよく聞いたことばに「金持ちは神に祈らなくても、いろいろなことを金で解決できるが、貧乏人には神しかないから」がある。この「貧乏人」が意思をもったのが民衆であり、フィリピンの多数派である。保守的な教会には頼らずに近代的な種々の人権法をつくるエリート少数派も、民衆の視点では「金持ち」の流れに見えるだろう。第二節でみたように、フィリピンはアジア諸国のなかでは国際人権諸条約の批准でも先頭に立ち、NGOも協力してこれを活用する人権教育を実施している。他のアジア諸国のように「西欧的な人権概念」云々の議論に足をとられなかったのは、フィリピンがキリスト教国であるおかげだろう。環境関連の法律などは欧米諸国にまねてつくられた進んだものも多い。しかし、それらが実際に多数派の貧困層の役にたっているのかどうかのアセスメントがされていない²⁷。また国際NGOからの経済的支援によって進められる人権教育にもやはり限界があり、現実には学校でほとんど実施されていない状況にある。

民衆のコミュニティに隣人愛があるとすれば、キリスト教倫理というよりも助け合うことでしか生きていけないからと同時に、他者を助けることで神に助けられるという体験的な信仰、つまり生きたスピリチュアリティが働いているからである。霊性とは他者を助けることだという答えを体験している人たちである。しかし、ここに外部からの金銭的支援などの楔が下手に打ち込まれると、このスピリチュアリティは壊され、他者依存的になる。ここでは割愛するが、私はフィリピンの幾つかの共同体の経済開発の現場でこの実例を見た。

ではどうすれば貧困から自由な、そしてジェンダーに基づく暴力のない「持続可能な共同体」づくりが可能なのだろうか。グローバル経済の下で多額の負債を抱えて、しかも軍事費のふくらんでいる現在のフィリピンでは、大多数の民衆女性にとっては、自分と家族が生きる権利を守ることと神に祈ることとは切り離せない連続性にある。しかし、少数派であり、問題の解決を担っている組織や制度は、この二つを切り離している。もしくは片方は権利の教育に、片方は霊的な癒しのほうに重点をおいて、それぞれが別に取り組んでいる。いいかえれば民衆は権利と癒しの谷間に追い込まれている状況ではないだろうか。山岳地の谷間には豊かな水が流れているが、都市の高層ビルの谷間にあるスラムは、大学

生のフィールド研修のために存在するわけではない。

「金持ち（権利をもっている者）に神はいらない」と「貧乏人（権利がない）には神がいる」という圧倒的な現実から、フィリピンの女性運動がどのような脱却を計ることができるのか。そのためには、第三節で見てきたように家族主義のなかで暴力に晒されている女性や子どもたちの問題を、教会や地域共同体の指導者を含めて解決できるようにすること、また民衆宗教のリアリティについて、たんに神話的にババイランを尊敬して、歌やおどりを自分たちの儀礼に取り入れるだけではなく、もっと具体的に問題をふくめて知ることが大事なのではないだろうか。

最後に、ここに記すことができなかつた多くの女性たちにも面談したが、さまざまに教えられることで本稿が書けたことを感謝したい。

注

- (1) エリザベス・ウイ・エヴィオータ、佐竹真明、稲垣紀代訳『ジェンダーの政治経済学—フィリピンにおける女性と性的分業—』二〇〇〇、明石書店、九二頁
- (2) Mary John Mananzan “The Christianization of the Filipino Woman” in *IN GOD’S IMAGE*, Vol.24, No.4, 2005, P.5
- (3) マッコイによれば、ババイランは古典マレー語のペリアン、ジャワ、バリ、ボルネオ、カルマヘラのワイランから来ており、霊媒師を意味するが、社会での儀礼や役割も共通するところ。McCoy, Alfred. “Baylan Animist Religion and Philippine Peasant Ideology” *Philippines Quarterly of Culture and Society*, Vol.10, 1982
- (4) Maria Milagros Geremia-Lachica “Panay’s Babaylan: The Male Takeover” in *WOMEN IN HISTORY AND REVOLUTION*, ed. by Thelma B. Kintanar, 1996, UP Center for Women’s Studies参照
- (5) たとえばフィリピンの約二〇〇の女性団体で構成されるガブリエラ（一九八四年創立）は、フィリピン独立革命で殺された女性闘志の名前をもつフェミニスト連合であり、国外にも支部があり、果敢に体制批判の活動を行っているが、集会では詩の朗読や歌、ダンスなどを入れたスピリチュアルな儀礼をよく行う。
- (6) 教皇ヨハネ二三世が開催。これまでのローマ・カトリック教会の正統主義の立場を方向転換し、他宗教との対話、教会再一致運動、典礼におけるラテン語以外の諸民族の言語の使用、平和問題や社会問題への取り組みの方針などを決定した。フィリピンのカトリック教会にも大きなインパクトを与えた公會議。
- (7) たとえば国立フィリピン大学（UP）の大学院生は四つのキャンパスすべてで女子学生のほうが多い。マニラ七一・八％、デイリマン六四・六一％、ヴィサヤ六三・三三％、ロスバニョス五一・八一％。大学生の女子の比率はさらに高い。学部の教授団および研究所スタッフも全キャンパスで女性のほうが多い。ただし、管理職は男性が上回る。“*Women and Men in the University of the Philippines*” by UP Center for Women’s Studies, 1996
- (8) Carolyn Isabel Sobrיתה “American Colonial Education And Its Impact of Filipino Women” in *WOMEN’S ROLE OF PHILIPPINE HISTORY* Second Edition, UP Center for Women’s Studies, 1996, pp89,90
- (9) 同右
- (10) 阿久澤麻理子「人はなぜ「権利」を学ぶのか フィリピンの人権教育」二〇〇二年、解放出版社、九二頁
- (11) 第二ヴァチカン公會議以降のフィリピンのシスターたちの変化を調査した統計資料による。*WOMEN RELIGIOUS NOW: IMPACT OF THE SECOND VATICAN COUNCIL ON WOMEN RELIGIOUS OF THE PHILIPPINES*, 1993, The Institute of Women’s Studies, St. Scholastica’s College

- (12) ニアール・C・オブライエン、大窪佐太郎・大河原晶子訳『涙の島 希望の島 ネットロスの人々」とある神父の物語』一九九一年、朝日新聞社、六八、六九頁
- (13) Alicia Molina "Toward the Development of Treatment Approach for Children Victim of Incest" in *GENDER VIOLENCE: ITS SOCIO-CULTURAL DIMENSIONS* ed. by C. I. Sobritchea, 2001, UP Center for Women's Studies, pp147,8
- (14) Ed. by Silvia H. Guerrero & Carolyn I. Sobritchea "BREAKING THE SILENCE: THE REALITIES OF FAMILY VIOLENCE IN THE PHILIPPINES And Recommendations FOR CHANGE" 1997 UP Center for Women's Studies, pp 25,79
- (15) 同右、pp44-49
- (16) フィリピン教育制度では義務教育六年の後に、中等学校四年、大学、中等学校後教育機関、技術専門学校などがある。中等学校後教育は年限が複数のコースが三種類ある。一般には中等学校のことを高校と呼んでいる。
- (17) C・レイモンドによれば、フィリピンの一五歳から二四歳の若者は全人口の二〇%を占めており、その内の独身女性の五〇%が都市居住者。女子の十二%が片親または親以外の人に育てられている。また、若者の高校および大学入学後の卒業率は、高校が四二%、大学が一六・七%である。Ed. by Corazon Raymond "ADOLESCENT SEXUALITY IN THE PHILIPPINES", 1999, pp1-5
- (18) エリザベス・ウイ・エウイオータ『ジェンターの政治学』前出書、八五―八七頁参照
- (19) Friezie F. Ramos, Maricar G. Savella "Student Prostitution" in *GENDER VIOLENCE: ITS SOCIO-CULTURAL DIMENSIONS*, 前出書 pp87-89
- (20) たゞえば北部ルンンの山岳地に住むポントック族の女性と社会を研究した森谷裕美子によれば、共同体全体の霊に関わる儀礼は「マタイ」と呼ばれる特別に選ばれた富裕層出身で人望の厚い古老男性が行い、これは一生の役職である。森谷裕美子『ジェンターの民族誌―フィリピン・ポントックにおける女性と社会』二〇〇四、九州大学出版会、二二二、二三頁
- (21) 山下明子「韓国の巫俗信仰とキリスト教 ある巫女の物語―『出会い』十一巻三号、一九九四、十九頁
- (22) 気功の一種で、十九世紀末頃に京都の白井シカオミが白井式霊気療法として始めたもの。死後、林忠治郎によってハワイに伝えられ、その後西洋で広まったのがレイキ運動で、Reiki AllianceのThe Radiance Techniqueの大きく二つの流れがある。このから日本にも入っている。Frank Arjava Peltter "REIKI FIRE" 1997, Germany参照
- (23) Iglesia Filipina Independiente ス페인人修道士やスペイン人司祭の任命権に反対し、フィリピン人の修道士や司祭を持つ運動によりローマ・カトリックから離れ、一九〇二年八月に創立されたフィリピンの教会。植民地政府に抵抗して礼拝中にフィリピン国旗を掲げ、国歌を歌った伝統を現在も続けている。聖人崇拜をするが、聖母マリア信仰はない。聖職者も結婚し、現在は女性司祭もいるが女性司教はいない。
- (24) Teresia Obusan "Another Development in Two Philippine Barrios" presented for the Ph.D. UP, 1994, p29
- (25) 本稿の内容はインタビューによるが、あまり取り上げられることのないスプレーマ・イサナルをミスター・マナンザンが近刊書のなかでフィリピンの民衆宗教の女性で「ソフニ」リスト視点から紹介している。Sr. Mary Mananzan "Woman, Religion & Spirituality in Asia", 2004, pp229-236
- (26) Sr. Mary Mananzan, 同上、pp235,6
- (27) Alfonso Aguirre "Learning to be Poor" in *IN THE SERVICE OF CULTURE, SPIRITUALITY AND DEVELOPMENT, A Festschrift for Dr. Mina M. Ramirez*, ed. by Leopoldo J. Degillas, 2001, Manila pp43-45